

南北戦争とふたりの「日本人」の物語

－「最後の授業」をもう一度－

ふるさわ みほ ささがわ ひろし (註1)
古澤 美穂・笹川 裕史

抄録：本稿では、2024年度「歴史総合」における笹川実践「サイモンとジョンの南北戦争」と、その実践（前提となる「ゲティスバーグ演説」の授業を含む）を継承・発展させる形で2025年度に古澤が行った授業について報告する。高校の世界史教員間の教材研究の共有や継承、交流や後進の育成を含めた研究会についても、貴重な活動の記録として言及した。

キーワード：歴史総合、世界史探究、南北戦争、移民、日本人兵士

I. はじめに

2005年春から教壇に立ち、世界史を中心に高校生に教えはじめた古澤が、その年度に出合って衝撃を受けた本のうちの一冊が、佐藤卓己の『八月十五日の神話—終戦記念日のメディア学』（ちくま新書、2005年）であった。この本から着想を得て過去におこなってきた「終戦」や「戦後」について考えさせる授業を、「戦後」「80年」を迎えた今年度、大幅に見直して実践した。詳細については別の機会に報告予定であるが、本校前教諭の笹川裕史氏にも、過去に同様の題材での実践がある^(註2)。今年度、自分自身が類似のテーマで新たに授業をするにあたり、先人たちの授業や教材の継承をより強く意識するようになった。このような経緯から、筆者が担当する本章が、『研究集録』に掲載する論文にしてはやや感傷的なものになることをお断りしておく。本稿で取り上げた実践にいたるまでの道程は、まさに、筆者自身の世界史教員としての物語でもあるからだ。その過程で痛感したのは、教員が50分授業を魅力的なものにできるかどうかは未知数であること——精一杯学んで教材研究をしたとしても、努力や経験である程度カバーできたとしても、生徒を魅了できるか否かに関しては、先人からの、あるいは世界の叡智からの「教え」に対して教員自身が、常に開かれているかどうかにかかってくる。同じ頃に読んだ内田樹の『先生はえらい』（ちくまプリマー新書、2005年）を読んでさらに確信した。「学ぶ（ことができる）力」に必要なのは、第一に、「自分は学ばなければならない」という己の無知についての痛切な自覚があること。第二に、「あ、この人が私の師だ」と直感できること。第三に、その「師」を教える気にさせるひろびろとした開放性、だと。こ

のようなスタンスでいけば、「ネタ」となる教材や「種本」との偶然の出会いなど、突破口が目の前に現れることもあるのではないかと。生徒たちの無関心との戦いの日々、ましてや「働き方改革」の「は」の字もない時代、校務や生徒指導に忙殺されていたが、それらを言い訳にせず、世界に存在するおもしろいものやワクワクすることに対して常にアンテナを張り、自身の「師」を求めて貪欲に学ぶことを最優先しようと思った。

笹川氏の「サイモンとジョンの南北戦争」の実践と今年度の古澤実践については、次章以降に譲るとして、まずはここで、これまでの笹川実践をふりかえっておく^(註3)。笹川氏との出会いは、2007年2月17日（土）に開催された本校の第54回（平成18年度）教育研究会で参観した世界史Bの公開授業「ジャズエイジと進化論裁判」であった。当時教員2年目だった筆者は、多感な中学2年生を相手に初めての担任業務に苦戦しながら中・高4～5科目の授業準備に追われ、土日は部活動指導で教材研究の時間がとれずに疲弊していたところ、新任研修で知り合った他校の世界史教員が、母校で行われる恩師の公開授業に誘ってくれた。会場の体育館サブアリーナは参観者の熱気が充満していたが、笹川氏が語り出した瞬間に静まりかえり、生徒を含む観る者すべてが、1920年代のアメリカ合衆国にタイムスリップしたような感覚にとらわれた。配布プリントの内容は的確で分量もほどよく、絶妙なタイミングで映像資料が提示される。内容は非常に高度で、大学生向けの講義としても十分通じるものだった。計算しつくされた授業構成や授業者の語り、しぐさの一つひとつに、ただただ圧倒された。自動車や家電製品などが普及し、大衆文化が開花したアメリカ合

衆国の20年代をダイナミックに描写し、笹川氏がめざす「歴史の舞台に生徒を放り込む」ことに成功していた。本質をついた授業は、どのような学校のどのような生徒にも通じるはずだと確信を持つとともに、そのような授業をめざして努力しなければならぬと気持ちを新たにされた。次に参加した2008（平成20）年度の全体講演会の講師が冒頭で触れた内田氏（テーマは「現場の教育論」）であったことも、筆者にとっては大いに参考になった。

ゼロ年代後半、関西の社会科教員が集って勉強する会は複数あり、どれも活発に行われていた。笹川氏らが携わる大阪や京都の研究会を教えてもらったが、私立の中高一貫校に勤めていたこともあり、授業のある土曜日に開催される研究会にはなかなか参加できず、結局、次に笹川氏の実践報告が聴けたのは、2009年9月26日の京都高等学校社会科研究会歴史部会の世界史読書会であった（「ドラクロア（ママ）の絵画『民衆を率いる女神』を用いた授業—ジェンダーの視点から」、於：同志社大学啓明館2階会議室）。ウジェーヌ＝ドラクロワの《民衆を率いる自由の女神》として知られる名画（原題は《民衆を率いる自由》）を題材にした授業実践^{（註4）}は、当時としてはまだめづらしいジェンダー史を扱ったもので、絵画資料の読み解きを通して、その難解さも含め、実に多くのことを教えられた。

ただ、徐々に謳われはじめた高大連携をめざす研究会では、高校教員が大学教員の講義をありがたく拝聴するという構図になり、敷居も高くなりがちだった。そのようななか、2010年代に、世界史の教材研究や授業準備に悩める若手教員たちが気軽に参加できる勉強会としてつくられたのが、「世界史アプローチ研究会」である。この会は、2014年夏に開催された全国歴史教育研究協議会（全歴研）第55回大会（大阪大会）を契機に、大阪府立狭山高等学校教諭の浅野典夫氏、同夕陽丘高等学校教諭の一ノ瀬雄一氏（以上、所属等は2014年当時）、笹川氏によって立ち上げられた。読書会の形式にとどまらず、世界史の授業にすぐに役立つ、あるいは近い将来に役立てられるような情報を交換する場とすることがめざされた。例会は1～2か月に1度開催され、初回は13名が参加したそうだ。第Ⅰ期は、『市民のための世界史』（大阪大学歴史教育研究会編、大阪大学出版会、2014年）の合評会からはじまった。前述の全歴研第55回大会には筆者自身も報告者の一人として登壇したことから、創設当初から声をかけてもらっていたが、部活動の練習や試合が土日にあるためなかなか参加できなかった。文化部の顧問になりようやく参加できたのは2017年のことで、

第Ⅱ期に入った研究会では、『史料から考える 世界史20講』（歴史学研究会編、岩波書店、2014年）を基本文献に、途中から浅野氏らベテラン教員以外の若手教員や中堅教員も果敢に報告を担当していくこととなった。第Ⅲ期には『名著で読む世界史120』（池田嘉郎他編、山川出版社、2016年）を取り上げた。その後、現在にいたるまでは、新書を含む、世界史にまつわる文献の紹介や授業実践の報告など、自由度を持たせるようになった。研究会についての詳細は、第Ⅲ期開始に示された企画案が詳しく、それをもとにまとめたものを掲載する。

「世界史アプローチ研究会」

1. 趣旨

- ・世界史の授業に役立つ基本文献の紹介
- ・世界史の授業に役立つもの（指導案・教材・アイディア・エピソードなど）の情報交換

2. 活動内容

- ・浅野・一ノ瀬・笹川の3人がローテーションで、レポートを行なう。
- ・そのレポートに基づいて、参会者の中で質疑応答・意見交換を行なう。
- ・他の参加者は、当日の例会のテーマにそった指導案・教材などを持ち寄る
- ・その他、随時、世界史に関する資料等を紹介する。

3. 会期

第Ⅰ期

2014年9月（第1回）～2016年3月（第14回）
『市民のための世界史』

第Ⅱ期

2016年4月（第15回）～2018年9月（第34回）
『史料から考える 世界史20講』

第Ⅲ期

2018年11月（第35回）～2025年3月（第85回）
・『名著で読む世界史120』
・世界史にまつわる本の紹介

第Ⅳ期

2025年6月（第86回）～現在
・世界史にまつわる本の紹介
・授業実践の紹介

世界史アプローチ研究会は今年度第Ⅳ期に入り、5～8名の参加者で継続している。2026年1月末には第89回例会を開催した。ただし、毎回1～3本の報告と議論が14時から18時頃まで展開される勉強会は、高校教員の集まりとしては相当ハードなものだ。新規参会者を増やし、活性化させ、継続させていくことが課題である。

さて、本稿で取り上げる南北戦争の授業実践は、この研究会の第84回例会（2025年2月22日）で笹川氏が、『南北戦争を戦った日本人 幕末の環太平洋移民史』（以下、『戦った日本人』と略）を取り上げたことが契機となった。筆者はその例会に参加できなかったため、翌第85回の例会にて、メインの報告（『カラマーゾフの兄弟』）の前に「サイモンとジョンの南北戦争」の実践報告を聴いた。

本稿では、Ⅱ章で2024年度の実践について笹川が、Ⅲ章で2025年度の実践について古澤が報告する。

Ⅱ. 2024 年度の実践

南北戦争の授業の1か月ほど前、書店に立ち寄ったとき、筆者は信じがたい題名の書物を目にした。『戦った日本人』である。

1861～65年の南北戦争の時代、日本は開国をしていたが、まだ江戸幕府の支配下で自由に海外に渡航はできなかった。もちろんごく少数の密航者はいたし、海難事故による漂流者もいただろう。しかし、そのような稀な機会をものにして合衆国に行き、南北戦争に従軍した者が二人もいたというのである。

筆者は、この二人を教材とする授業を構想し、実践してみたいと考えた。

1. 南北戦争と日本社会

南北戦争は、合衆国だけではなく、世界全体にも大きな影響を与えた出来事である。しかしながら、日本社会との接点は限られている。筆者がこれまでの授業で言及してきたことは、次の2点であった。

1860年代の日米貿易について

生徒の大半は、日本を開国させた合衆国が幕末の貿易の主要な相手国だというイメージを抱いている。しかし1865年の横浜港における貿易相手国は、イギリスが輸出・輸入とも80パーセント以上を占めていたのに対し、合衆国は輸出・輸入とも2パーセント以下であった。

イギリスの海運会社P&Oは、1859年に上海～長崎間を延長して日本に定期船がくるようになっていた。一方、太平洋の横断に関しては、合衆国のPM社がサンフランシスコ～横浜～香港の横断航路を開

設したのは1867年であった。定期航路の有無によって、対日貿易におけるイギリスの優位は明らかだが、それにしても合衆国の2パーセント以下という数値は、あまりにも低すぎる。

他の要因としては、南北戦争の影響がある。当時の合衆国の人口（約3144万人）の少なく見積もっても2パーセント以上が犠牲となっている。この戦争による対日貿易の低迷は不可避だったといえよう。

戊辰戦争について

1868年に始まった戊辰戦争では、新政府側にイギリスが、旧幕府側にはフランスが協力する図式となったが、合衆国が関与しなかった（できなかった）のは、南部再建をはじめとする南北戦争の戦後処理・復興の影響があったと思われる。

また戊辰戦争は南北戦争と異なり、1年半ほどで決着がついている。短期間で終わった一因として、新政府側と旧幕府側との武器の相違があげられる。

当時の欧米では、ミニエー銃の一種で銃身内部に螺旋（ライフル）を施し弾道を安定させた施条銃であるエンフィールド銃が新型の銃として普及していた。射程距離は、これまでの滑腔銃だったゲバール銃の3倍以上、命中率も5倍以上だった。

戊辰戦争では、南北戦争で使用され、戦後だぶついていたエンフィールド銃が5万挺も輸入されている。結果としては、新政府が旧幕府側よりも早くエンフィールド銃を入手し、ゲバール銃主体の旧幕府側を圧倒したのである。

2. 南北戦争を戦った日本人

米国国立公文書館に保存されていた「二人の日本兵」の兵役記録の基本情報が資料Ⅱ-Aである^(註5)。

この「二人の日本兵」は、生徒たちが数多くの疑

資料Ⅱ-A (1) 南北戦争…米国国立文書館（NARA）に保管されている兵役記録より

資料A. サイモン・ダン

住居 ニューヨーク州、ブルックリン市（現在のニューヨーク市）

1863年12月7日、ブルックリンで陸軍に入隊。ニューヨーク第158歩兵連隊E中隊

1865年8月28日、除隊（リッチモンド、ヴァージニア州）

日本生まれ、21歳。職業 労働者、目の色 黒い、髪の毛の色 黒い、肌の色 浅黒い

身長 5フィート（152センチメートル）

資料B. ジョン・ウィリアムズ

1864年8月25日、ブルックリンで陸軍に入隊。兵卒、三年 ニューヨーク第1騎兵連隊I中隊

1865年6月16日、ワシントンDCの病院から除隊

日本生まれ、22歳。職業 労働者、目の色 黒い、髪の毛の色 黒い、肌の色 浅黒い

身長 5.1フィート（155センチメートル）

ウィリアム・E・ベイリー（Bailey）Jr. の代替、下院選挙区第3区

問を抱き、考察する面白さを実感できる、きわめてすぐれた教材である。たとえば、

- ①本当に日本人なのか？
- ②日本人ならば、どうして日本名ではないのか？
- ③いつ合衆国に来たのか？
- ④なぜ合衆国に来たのか？
- ⑤どのような方法で合衆国に来たのか？
- ⑥いったい何者なのか？
- ⑦なぜ南北戦争に従軍したのか？
- ⑧南北戦争後、どのような生活を送ったのか？

などの疑問（以下、「8の疑問」と略）がすぐに挙げられる。これらに答えるためには、どのような資料が必要なのか、生徒たちは考えなければならない。少し大げさだが、生徒たちは、「二人の日本兵」を追究する歴史家の立場を経験することになる。

さらに、この「二人の日本兵」に関しては「結局のところ二人が誰だったのか——本名や出身地等——については、明らかにしなかった」という著者の結論が出されていた。大半の生徒たちにとって、疑問と解答はペアである。「わからない／わからなかった」という結論は失敗だと考えてしまう。しかし研究をしても「わからなかったこと」は多々ある。研究によって「わからなかった理由」が明確になることも重要である。「二人の日本兵」の正体は不明という結論を生徒たちがどのように受け止めるか…これも筆者にとっては重要な関心事であった。

3. 授業の準備

本節では、まず2024年度に実施した「南北戦争」の授業の概略を紹介し、つづいて授業「二人の日本兵」の実践までの経緯を示しておく。

(1) 授業「南北戦争」

授業は3学期の1月中旬に実施した。授業プリントのタイトルは「合衆国と南北戦争」とした^(註6)。

筆者は授業の際には、A4判縦向きのプリントを配布し、空欄に必要事項を書き込ませるようにしている。掲載したプリントでは、その空欄記入語句を二重下線を引いた**太文字**で示した。またプリントには、ポイントとなる質問(Q)をいくつか載せて、生徒に自分の考えを書かせている。太い下線の引かれた箇所は質問に対する筆者の解答例である。

授業「南北戦争」の、生徒に理解させたい点は数多くあるが、4点に絞ってコメントをしておく。

内戦

南北戦争とは、英語のcivil war（内乱・内戦）を固有名詞とした the Civil War の訳語である。アメ

リカ連合国として分離独立しようとした南部諸州と、それを認めなかったアメリカ合衆国との戦争であった。つまり南北戦争とは、敗北に終わったアメリカ連合国の独立戦争でもあった。またこの戦争は、南北各陣営に分かれた各州の正規兵によって戦われたために、当時の合衆国の人口の2パーセントが落命する悲惨な出来事となった。

経済

南北戦争のもっとも大きな原因は合衆国北部と南部との間での経済（貿易）政策をめぐる対立であった。当時の合衆国南部は、同じ合衆国の北部ではなく、イギリスと経済的に深く結びついていた。近代世界システムにおける中核（覇権国家）イギリスの半辺境だったのである。このような状況のもと、国民国家としての経済的統合をめざしていた合衆国北部が、南北戦争に勝利し、合衆国南部をイギリスから奪いとった（取り戻した）ことで、合衆国は中核に成りあがっていくチャンスをつかんだのである。

奴隷制

南北戦争は奴隷制度廃止のために戦われたという印象が大きいが、それは結果論である。リンカン本人は奴隷に同情していたが、開戦から2年後に出された奴隷解放宣言は、あくまでも戦争に勝つための手段であった。つまり奴隷たちに怠業や反乱を示唆し南部社会を混乱させること、さらに奴隷制度廃止を掲げることでイギリスの南部支援の芽を摘み取ることが目的だった。そして戦後、奴隷解放は実施されたが、解放奴隷への実質的な社会的平等を保障しなかったため深刻な黒人問題が生じたのである。

ゲティスバーグ演説

1863年7月のゲティスバーグの戦いは、南北戦争最大の激戦であり、この戦いでの北軍の勝利が戦争全体の帰趨を決したとされている。リンカンのゲティスバーグ演説は、同年11月に、この戦いの犠牲者の改葬式で行なわれ、その最後の一文によって民主主義の不滅を訴えたスピーチだと考えられている。しかし演説全文を読むと、そのような理解が不正確であることがわかる。すなわちリンカンは、キリスト教の復活思想を背景に、戦場で倒れた兵士たちと、内戦によって崩壊に直面している合衆国とを重ねあわせ、この両者は必ず再生するという信念を述べたのである。そしてリンカンの暗殺という悲劇によって、演説の評価がさらに高まった。

資料Ⅱ-B 24・69・I年 歴史-26 合衆国と南北戦争

(1) 南北戦争 (1861～65年) の原因

- ・ 西部開拓 の進展による南北対立 (と本質的相違)

Q1 : 西部とは、どこから西をさすのか? アパラチア山脈から西側

[北部] vs.

[南部]

工業・自営農業

プランテーション農業

保護貿易

自由貿易

賃金労働者

黒人奴隷

Q2 : 南部が北部の製品よりもイギリス製品を購入していた理由は? 安価で高品質だったから

- ・ 1860年…共和党のリンカンが大統領に → 南部諸州は、アメリカ連合を結成

(2) 戦争の経過と結果

Q3 : 北部の人の戦意が高くなかった理由は? 奴隷廃止のために白人が犠牲に / 去る者追わず

- ・ 1862年 ホームステッド法

63年 奴隷解放宣言

Q4 : 奴隷解放宣言の狙いは? 南部の農場での怠業 / イギリスの南部支援を阻止

ゲティスバーグの戦い

Q5 : ゲティスバーグ演説の真の目的は何か? 兵士たちの復活と同様に合衆国の再生を強調

- ・ 戦争の結果

- ・ 国民国家の再生 (再建)

- ・ 資本主義の進展

→ 英国の「半辺境」だった南部を北部が支配し「中核」へ発展

大陸横断鉄道の開通

黒人問題が深刻になっていく

Q6 : 合衆国の奴隷解放がなぜ北部の工業化につながったのか?

より安価な労働力として黒人を労働させたから

資料Ⅱ-C 24・69・I年 歴史-31 サイモンとジョンの南北戦争

(1) 南北戦争 (1861年4月～65年5月 北軍36万222人・南軍25万8000人の死者)

Q1: 資料AとBから読み取れる共通点

- ・ 日本生まれ、容姿などは日本人に似ている ・ 入隊場所はニューヨーク

Q2: 資料AとBから読み取れる相違点

- ・ ジョンは、代替兵 ・ ジョンは、騎兵部隊

Q3: 資料AとBを讀んでの疑問点は?

- ・ 日本人が南北戦争に参加したのか? ・ 日本人ならば、なぜ英語風の名前なのか?

(2) 移民の国、合衆国

Q4: 戦争時の北軍兵士のうち移民の割合は、どの程度だったか? 4分の1から5分の1

cf: 合衆国のヨーロッパ系移民…19世紀後半まで (旧移民)・19世紀後半より (新移民)

Q5: 大陸横断鉄道は「東はウイスキーが、西はお茶がつくった」の意味は?

東はアイルランド系移民、西は中国系移民のこと

(3) 二人の人物像

Q6: 渡米ルートは、そしてニューヨークまでのルートは?

西回りヨーロッパ経由? 東まわり西海岸からだど、大陸横断? or パナマ地峡経由?

Q7: その後の二人…新聞・センサス・墓碑 etc. による探索を追加

*サイモン・ダン…入隊直後に脱走し、1864年3月24日に第158歩兵連隊に合流。団? 左衛門?
除隊後ニューヨークに。1900年のセンサスにそれらしき人名が。

*ジョン・ウィリアムズ…筆跡は×。元侍か? 入院記録

除隊後アレクサンドリアに。まもなく死亡か。

(cf: 報奨金とブローカー …217ドル+13ドル/月(兵卒) → ブローカーの暗躍)

Q8: 幕末の日本人の移動を考える

①漂流者たち …太平洋ではアメリカの捕鯨船に救助される者が多数。

②密航者たち …西日本出身者が多数。渡航目的があったので、南北戦争への従軍は可能性小。

③咸臨丸…1860年の遣米使節団に随行した者の誰かが帰国せずに残留した可能性あり。

2/4品川発、3/17桑港着(3/24～4/28修理)、5/8発、6/24着。

提督は木村喜毅。総数は96(士官26、水夫等67)人? 不明者は3人か。

→ 船員病院の残留者8～10人か。そのうちの1人が帰国せず?

④万延元年(1860年)の遣米使節団 …正使は新見正興。総勢77人。1名は病氣療養だが脱落は?

⑤竹内遣欧使節団(1862～63年)と池田遣欧使節団(1864年)

⑥留学生 …cf: 長州五傑 渡航目的からして従軍の可能性は低い

（2）授業「二人の日本兵」の計画

「南北戦争」につづけて「二人の日本兵」の授業を実施することは、授業準備や校務の都合で現実には困難であった。そこで幕末から明治維新までの日本の動向（安政の大獄～琉球処分）を世界全体の中に位置づけて3時間実施した。その次は西南戦争から大日本帝国憲法発布までの日本国内の動きを1時間で概観したあと学年末考査となった。

本校の現在のカリキュラムでは、歴史総合の2単位は1～2年での分割履修となっている。そのために結果としては、3学期の正規の授業終了後は、考査後の補習授業1回だけとなった。

「二人の日本兵」の授業をどうしたものか考えていた時期に、筆者は「世界史アプローチ研究会」で『戦った日本人』を紹介してみた。研究会の出席者たちは、「南北戦争に日本人が参加していること自体に生徒は大きな興味をもつ」「その日本人が、いつ・どのような手段で・どのような理由で合衆国にわたって来たのかを調べる探究型の学習になる」「日本史と世界史をつなぐという意味でも歴史総合に相応しい教材になる」など、『戦った日本人』の教材化を肯定する意見ばかりだった。じつは「二人の日本兵」の授業をすることに躊躇い始めていた筆者は、実施にむけてつよく背中を押された。

また南北戦争と移民について、筆者は、自身の高校1年生の英語の教科書に載っていた“The Blue and the Gray”が印象につよく残っていた^{（註7）}。それは南北戦争の頃のミズーリ州のドイツ系移民の家族の物語であった。合衆国は移民の国であると生徒たちに説明しながら、では、その移民たちが南北戦争という一大事にどのように向き合ったのか、これまでの授業で筆者は取りあげたことがなかった。「二人の日本兵」の授業では、そのような側面にも着目したいと考えた。

授業では、まず二人の兵役記録を読み、名前・年齢などの基本事項を確認させる。その過程で生徒たちに前述の「8の疑問」を意識させ、その疑問を解いていく流れで授業を進めていくことにした。

筆者の授業形態は、歴史総合でも一斉講義を基本としていたが、今回はグループ活動を少し取り入れようと考えた。ただしグループ活動に時間を取られて、最後まで授業が進まないと困るので、途中で一斉講義に切りかえることにした。

なお授業のタイトルを「南北戦争と二人の日本兵」とすれば、ストレートに生徒たちに授業テーマを伝えられるが、妙味がなさすぎる。そこで、タイトルからは日本兵を想像できないように一捻りして「サイモンとジョンの南北戦争」とした。

4. 授業の採録

下記の授業採録は、4クラス分の授業の概略を示したものである。【 】内は、授業の進行等に関する説明である。

【休み時間】

授業プリントと資料を配布しておく^{（註8）}。まだ生徒全員はそろっていないが、4人グループをつくり、机を島型に配置するように呼びかけておく。

【始業の合図…本校はチャイムがない】

今日の授業で1年次の歴史総合は終わりです。今日は特別に、1月に勉強した南北戦争について、資料を読みながら、かなり具体的に見ていきます。

では、授業プリントのQ1とQ2です。資料プリントのAとBの記録を見て、グループで相談をして自分の回答を書いてください。回答はグループの結論にあわせなくても構いません。グループでの相談は、自分の考えを深めるための参考です。Q1とQ2の両方を5分ぐらいで。最低、2つずつ回答を書いてください。【机間巡視。5分経過】

では数人に発表してもらいます。まずQ1は、どうですか？【生徒を指名】

——二人とも、ニューヨークで入隊している。

——日本生まれ。【別の生徒を指名】

——二人とも、身長があまり高くない。

——二人の目や髪の毛や肌の色が黒い。

——サイモンもジョンも若い労働者だった。

ではQ2については？【次の生徒を指名】

——ジョンは騎兵隊に入ったけれど、サイモンは歩兵だった。

——サイモンはヴァージニアで除隊したけれど、ジョンはワシントンで除隊。【別の生徒を指名】

——ジョンは病院に入院しているみたい。

——ジョンは途中でベイリーと交替している。

では、次にQ3です。3分ほどで。グループ相談ありです。記入欄は2つですが、たくさん疑問を出してください。グループ関係なく、自分だけの疑問もOKです。【机間巡視。3分経過。数名を指名】

——このアメリカ人は、なぜ日本生まれなのか。

——この二人は日本人なのか。

——なぜ日本人のような体つきなのか。

——日本人だとしたら、どうしてアメリカ人の名前になっているのか。

——なぜ軍隊に入ったのか。

まだまだ疑問はあると思いますが、いったんここで止めます。みなさん、この2人は日本人でしょうか？日本人だと思う人、挙手。【4割ほど挙手】ではアメリカ人だと思う人は？【2割ほど挙手】分

からない人…【3割ほど挙手】

難しいですね。いちおう研究者は、この二人は日本人だと推測しています。でも日本人だったら、それはそれでいろいろな疑問がでてきます。そういった疑問についても考えたいのですが、ここで少し、移民についての話をしたいと思います。

みなさんは、合衆国が移民によって創られた国だと考えていますよね。では当然、その移民たちも南北戦争に関わっているはずです。Q4です。北軍に限定してですが、北軍兵士の何パーセントが移民の兵士だったのでしょうか？【数名の生徒を指名】

——10パーセント。

——分かりません。

——100パーセント。

えっ！ どうして？

——アメリカ人は、もとはみんな移民だったから。

なるほど。うーん。言い換えます。移民だったけれども合衆国の市民権を得て、正式に国民になった人は除きます。移民として合衆国に渡り、生活をしているけれど、まだ合衆国の市民権のない人です。

——0パーセント。まだ国民じゃないから…。

はい。難しい問題でした。じつは4分の1から5分の1、20～25パーセントでした。南北戦争で北軍に参加した黒人兵のパーセントが約10パーセントだから、その倍以上でした。先ほどのサイモンとジョンもそういった移民の中の二人でしょう。

さて合衆国はヨーロッパからの移民である白人が、先住民のインディアンを追い出し、黒人を奴隷として使役して創った国ですが、ヨーロッパ系の移民は、歴史的には大きく2つに分けられます。

まず1890年頃までのヨーロッパ系移民はイングランド、アイルランドなどのイギリス系やオランダ・ドイツなど、おもに北・西ヨーロッパからの移民でした。かれらを旧移民といいます。一方、1890年以降20世紀初めに急増したイタリアやロシア・ポーランドなど南・東ヨーロッパからの移民は新移民と呼ばれています。

旧移民は英語が話せた。ドイツ語も英語に近かったので、事務系を含めた幅広い職種につけました。一方、新移民は、ホームステッド法の噂を聞き、合衆国に行けば自作農になれると信じて移住したけれども、すでにフロンティアはなくなっていました。都会で働こうとしても言葉の壁があり、単純労働にしかつげず、貧しい生活を強いられました。国に頼ることもできなかつた。結局、たとえばイタリア人なら、イタリア人同士が助け合いをするしかない。そのようななかで力を握った者がボスとなり、マフィアみたいな非合法の組織がつけられたのです。

さて南北戦争後の1869年に大陸横断鉄道が開通しましたが、これに関係する言葉がQ5です。どのような意味でしょうか。移民と関係しています。ウィスキーとお茶は、もちろん比喻です。鉄道の東半分を作ったウィスキーとは何？【生徒を指名】

——ドイツ人。

ドイツは、ビールでしょう。ウィスキーだから？

——イギリス人。

惜しい。アイルランド人です。1848年前後のジャガイモ飢饉で多くのアイルランド人が、合衆国に渡った話を思い出してください。ではお茶とは？

——イギリス人。

えっ。なぜ？

——紅茶だから。

うーん、ここでいうお茶は緑茶かな。西だから。大陸横断鉄道の西半分を作っているのだから…合衆国の西半分、太平洋側。

——…中国人？

はい。アヘン戦争やアロー戦争、そして太平天国の乱で混乱した清朝から、この頃、中国人が華僑となり、合衆国の西海岸に多く来ていました。ヨーロッパ人だけでなく、19世紀中頃からはアジア系の移民も増えてきたということです。

では、サイモンとジョンの話に戻ります。彼らも移民だったわけです。ここでQ6です。彼らは…といっても二人が一緒に行動したのではないですが、どのようなルートで合衆国に来たのでしょうか。しかも彼らが来たのはニューヨーク。どのようにしてニューヨークまでたどり着いたのでしょうか。4人で2～3分、相談してください。【3分経過】

授業を急ぐので私の方から言います。当時は飛行機がない。合衆国に行くのなら船です。地球は丸いから、西回りか東回りのどちらかです。地球儀を思い浮かべて…。西回りは、日本を出発し、南シナ海～インド洋～紅海、スエズでいったんエジプトに上陸し、そこから地中海、ジブラルタル海峡を抜けてヨーロッパ。そしてさらに合衆国行きの船に乗り、大西洋を渡って、やっとニューヨークです。

東回りだと、太平洋を突っ切って合衆国の西海岸に到着です。しかし太平洋横断の東回りだと楽勝だと思うのは甘い。西海岸からニューヨークまで、どうやって移動したのでしょうか？先ほど話をした大陸横断鉄道はまだ開通していません。当時、合衆国の西海岸と東海岸を結ぶルートは2つありました。

一つは駅馬車を乗り継ぐことです。みなさんは驚くと思いますが、この時代は、運が悪ければ、駅馬車で東西間の移動は1年近くかかりました。大変やね。もう一つのルート、分かるかな？ ちょっと

難しい…。船で南のパナマまで移動して、パナマ地峡を、まだパナマ運河は出来ていないから陸上を移動して、カリブ海側にて、そこからニューヨーク行きの船で北上するという経路です。

ヨーロッパ経由の西回りルート、太平洋横断の大陸横断ルートと、パナマ地峡迂回ルートの3つ。どのルートか不明だけれども【生徒に尋ねたかったが、時間の都合で省略】とにかくニューヨークかその近辺でサイモンとジョンは居住し、おそらく働いていたと思われます。

職業は二人とも「労働者」ですが、当時のこの言葉は、いまの日本でいう「非正規採用」「アルバイト」の意味で、不安定な労働環境でした。

また「日本生まれ」の二人は、「目の色 黒い」「髪の毛の色 黒い」「肌の色 浅黒い」、さらに身長は5フィート（152センチメートル）前後ですから、当時の典型的な日本人の容姿でした。なお肌の色の「浅黒い（dark）」というの中国人の肌の色を示すのに多く使われ、「黒い（black）」とは異なる形容詞でした。【8つの疑問①への回答】

さてサイモン・ダンとジョン・ウィリアムズ、どう考えても日本人の名前ではありません。これはどうということなのか？

簡単にいえば、アメリカ人にとって発音しやすい名前に変えられたと思われます。少し話がずれますが、今から約40年前、フランスのギタリストのクロード＝チャリが日本国籍を取るとき、法律上の手続きもあり、名前を智有蔵上人と変更しています。これと似たことが、約20年前に逆の立場でありました。プロ野球ダイエーホークスのキャッチャー城島健司がメジャーリーグに行ったとき、どう呼ばれたか知ってる？ …ジョージ＝マッケンジー。というわけでQ7です。サイモン・ダンの場合も、たとえば、団左衛門という日本の名をダン・サイモンとしたかもしれないと研究者は推測しています。

一方、ジョン・ウィリアムズについて、誰か「スター・ウォーズの作曲家や」と言っていました。少し失礼ですが、この名前は、日本では山田太郎…ものすごくありふれた名前です。つまりジョン・ウィリアムズの日本人名は分からないけれども、合衆国では誰もが覚えやすい、一般的な名前を付けられたということですね。【8つの疑問②への回答】

付け加えると、この二人は英語が書けませんでした。入隊申請書の筆跡が途中で変わっていることから、誰かに代筆してもらったと思われます。

ではサイモンとジョンが兵士になった理由は？ 当時の移民にとって志願兵になることは（戦場での生死・負傷を無視すれば）、当座の収入、そして戦

後の生活に有利でした。たとえば入隊するとその直後に報奨金が100ドル、そして最も階級の低い兵卒でも月給が13ドルもらえました。現在の日本円に換算すると報奨金が65万円、月給が4万円程度です。最底辺の生活をしてきた移民だったら、この報酬は馬鹿になりません。なおジョンの兵役記録に「ウィリアム・E・ベイリー（Bailey）Jr.の代替下院選挙区第3区」という一文がありました。これは、もともとはベイリーという人が徴兵されたけれども、彼の身代わりとしてジョンが兵士になったという意味です。Q2で「ジョンは途中でベイリーと交替している」と指摘してくれた人がいましたが、当時は、自分の代わりに兵役についてくれる人間を探させた人は、徴兵が免除されました。もちろん代わりに兵役についた人間には、もとの人からは、それ相応の謝礼金が渡されたと思います。

さらに移民にとっては、従軍し名誉除隊となった外国人兵士に帰化権を与える法律が制定されたことも重要でした。移民にとって、合衆国の正式な国民になれるということは、いうまでもなく大きな魅力でした。二人の日本人が、北軍の兵士になった本当の理由は不明ですが、しかし移民が志願兵となった理由の一端は理解できたと思います。お金と帰化…合衆国で生活するためには、どちらも重要なものでした。【8つの疑問⑦への回答】

なお志願兵になると報酬がもらえることに目を付けて、言葉たくみに移民を入隊させて、報奨金などをだまし取る詐欺師やブローカー（業者）がいたようです。残念ながら、二人の日本兵が、そのような詐欺にあわなかったという証拠はありません。

さて南北戦争後、この二人の日本兵はどうなったのでしょうか。新聞、センサス、墓碑などのさまざまな資料をふまえて研究者は、サイモンは1900年までニューヨークで生きていたが、ジョンは戦後すぐ1867年にアレクサンドリアという町で亡くなったと推測しています。授業プリントにも書いてありますが、あとで各自、確認しておいてください。【8つの疑問⑧への回答】

Q2で「ジョンは騎兵隊に入った…」と答えてくれた人がいましたが、騎兵隊に入ったということは、非常に重要な情報です。というのは、当時の日本で馬に乗る人間というのは限られていたからです。分かるかな？【生徒を指名】
——武士。

はい。ジョンに関しては、侍だった可能性が高いですね。【8つの疑問⑥への回答】

最後のQ8ですが、時間がないので、駆け足でいきます。幕末の日本で外国に行った人とはどのよう

な人だったのでしょう。サイモンとジョンは、ともに1844年前後の生まれとしておきます。さすがに合衆国に渡ったのは日本が開国した1854年以降でしょう。では開国後、どのような人たちが、どのような方法で合衆国に渡ったのでしょうか。

授業プリントを見てください。①は漂流者です。たとえば、幕末から明治時代前半に通訳などで活躍したジョン万次郎は漂流者でした。彼は、遭難したのも日本に帰国したのも、日本開国の前でした。

②は密航者です。同志社大学を創った新島襄を、みなさん知ってますか？ 彼は1864年に函館から密出国をしています。ふつう密航者は、長崎に近い西日本出身者が多かったようです。

さてみなさん、③の咸臨丸は知っていますよね。幕府が所有した蒸気船の西洋式軍艦です。これは④の万延元年（1860年）の遣米使節団に随行して、合衆国に行っています。授業プリントに注目してください。ところが咸臨丸の船員の人数が96人前後？ とはっきりしていないうえに、合衆国到着後に現地の船員病院に8～10人が入院・残留しています。そしてそのうちの1人が、どうやら帰国していないようですが、それが誰かは不明です。

④の万延元年（1860年）の遣米使節団は、総勢77名で渡米し、1名が現地で病気療養をしています。後日、帰国しているようです。

ヨーロッパには、⑤の竹内遣欧使節団と池田遣欧使節団が派遣されています。両使節団とも全員が帰国しています。かりに使節団からの離脱者がいたとしても、その人物がさらに大西洋を渡ってニューヨークに行くことは金銭的に困難ですし、また兵役記録にあるように、1864年8月までに合衆国の陸軍に入隊することはできないでしょう。

⑥最後は留学生です。幕府は留学生を多く派遣していますが、その大半は1865年以降でした。それ以前では1862年にオランダに15人を派遣していますが、全員合衆国に寄ることなく、帰国していることが確かめられます。あと長州藩が幕府に悟られないように5人の藩士をイギリスに留学させています。その5人は後に長州五傑と呼ばれるのですが、伊藤博文や井上馨が参加していました。留学生は、欧米で学んだ学問や技術を帰国後、日本で生かそうとしているわけですから、南北戦争に参加して危険な状況に自らをおくはずがありません。

結局、研究者たちはいろいろ探究していきましたが、この二人が、いつ・なぜ・どのようにして合衆国に来たのか、今の段階では詳細は分からないということです。最後、結論は「分からない」ということで、がっかりした人もいるかも知れませんね。【8

つの疑問③④⑤への回答】

では本日のワークシートを見てください。ワークシートのQ1からQ3まで、いつも申し訳ないですが、休憩時間に書いてください^(註9)。書ける範囲で書いて終礼のときに提出をしてください。

では、これで授業を終わります。【授業時間を1分ほど超過】

5. 生徒の反応…ワークシートから

ワークシートの提出者は143人であった。生徒は、授業終了後の休憩時間や空き時間に記しているの、熟考された記述は必然的に少なくなる。ワークシートを授業中に書けるように授業内容を精選することが、筆者にとって毎回の課題であったが、結局改善されないまま、最後の授業も終わった。

以下、ワークシートのQ1とQ2について、生徒の回答を概観してみたい。

(1) サイモンまたはジョンの人物像について

Q1「「サイモン」か「ジョン」(どちらかに○印)の人物像を推測してみてください」

渡米の理由 (自由記述)

従軍の理由 (自由記述)

サイモン選択者 …59人
ジョン選択者 …80人
不明 (○印なし) … 4人

ジョンがサイモンより若干多かったのは、ジョンの身分が侍だと推測できて、次の質問項目である「渡米の理由」と「従軍の理由」を書きやすかったからではないだろうか。

「渡米の理由」に関しては下記の通りであった。
(サイモン選択者の内訳)

- a. 海外 (アメリカ・欧米等) への興味 …14人
- b. アメリカの技術等を学ぶため … 1人
- c. 漂流していて助けられた …25人
- d. 金銭・土地が欲しかったから … 8人
- e. 使節団や咸臨丸の一員だった … 3人
- f. その他 … 8人

(ジョン選択者の内訳)

- a. 海外 (アメリカ・欧米等) への興味 …15人
- b. アメリカの技術等を学ぶため … 3人
- c. 漂流していて助けられた …14人
- d. 金銭・土地が欲しかったから …20人
- e. 使節団や咸臨丸の一員だった …16人
- f. その他 …12人

サイモン選択者とジョン選択者の間では、項目aとbの間には、ほとんど相違がなかった。一方cはサイモン選択者に多く、eはジョン選択者に多かった。サイモンを武士ではなく、ジョンを武士と想定すれば、cとeの人数の差は納得できよう。

相違がもっとも大きかったのが、項目dであった。そしてジョン選択者の中には「明治維新によって侍の地位を失ったから…」「侍としての権利を失ったから」という回答が少なからずあったのは残念だった。南北戦争は明治維新より前の出来事である。その前後関係を確認せず、自分なりのストーリーをつくる生徒は一定数、存在するのである。

項目fに関しては、ジョン選択者の中には「ベイリーに騙されて（アメリカに来た）」「誘拐された」という主旨の回答が7あった。また「武者修行」という類の回答も。一方サイモン選択者の中には「もともとアメリカ人だったから」「故郷へ帰るため」という回答が散見された。どうしてもサイモン・ダンという名前に引きずられてしまうのだろうか。

「従軍の理由」に関しては下記の通りであった。
〈サイモン選択者の内訳〉

- | | |
|-------------------|------|
| a. 金銭を稼ぐため・生活のため | …32人 |
| b. 永住権を得るため・生活のため | …10人 |
| c. 武士として活躍するため | … 6人 |
| d. その他 | …11人 |

〈ジョン選択者の内訳〉

- | | |
|-------------------|------|
| a. 金銭を稼ぐため・生活のため | …27人 |
| b. 永住権を得るため・生活のため | … 5人 |
| c. 武士として活躍するため | …26人 |
| d. その他 | …22人 |

「金銭を稼ぐため」あるいは「たんに生活のため」という回答はaとし、「永住権を得るため」という主旨が記されていた回答はすべてbとした。

サイモンの場合は半数以上がaであるが、士分と推測されるジョンの場合は、回答が大きく三分されるという特徴がみられた。cに関しては、「侍の経験を生かせるから」という主旨よりも「戦いを求めて」「強くなりたかったから」「血が騒いだから」という“マッチョ”な理由が多かった。そしてdについても、ジョンの場合は“ベイリーの代替”に関連した回答が16あった。そのうち半数近くが「ベイリーに生活を保護してもらっていた代償（恩）として代理兵になった」という内容であった。生徒なりの合理的・因果関係のあるストーリーをここでも見ることになった。

ワークシートのQ1のさまざまな回答の有効性を生徒たち自身に検討させることが、本来の歴史探究の第一歩になることを筆者はあらためて確認した。

(2) 歴史研究・学習としての意味

Q2「サイモンとジョンの確実な経歴は結局、現段階では分かりませんでした。あなたは、このことについて歴史研究として無意味（失敗）だったと思いますか？」…5段階の指標で回答

- | | |
|----------|--------------|
| 5（無意味） | … 3人（ 2.1%） |
| 4（5と3の間） | … 4人（ 2.8%） |
| 3（ふつう） | … 12人（ 8.4%） |
| 2（3と1の間） | … 64人（44.8%） |
| 1（意味はある） | … 57人（39.9%） |
| ?（わからない） | … 3人（ 2.1%） |
| 合計 | … 143人 |

各指標の代表的なコメントを抜粋しておく。

5—結果が出ていない。／分からなかったなら無意味だと思います。／サイモンとジョンの経歴が分かっても、どんな成果があるのか分からない。

4—結果、何らかの役に立つほどにしっかりとした情報になっていないから。／研究者らにとって残念だとは思いますが、「分からない」という結果も、歴史としてのおもしろいところだと思う。／想像でしかない。

3—他の歴史的事実を発見したとき、サイモンとジョンについて調べたことと何か関りがわかって、新たな事実を発見できるかもしれないから。／日本人が南北戦争に参加していたという事実が歴史的に価値のあることだと思うから。／調べた過程で得られたこともあると思うけど、結局確実な経歴は分からなかったから。／ジョンとサイモンの生い立ちを知ることによって南北戦争の実体の解明に近づくと思ったから。

2—例が少なすぎて、意味があるか分からない。（4の間違い？…引用者註）／もっと記録に残っている人を研究の方が確かな結果を得られると思ったが、大発見をする可能性もあるのでムダとはいえない。／当時のことに関して少しでも情報が増えたのなら、たとえ真実にたどりつけなくても意味はあったと思う。／分からないことも多いが、少なくとも渡米して従軍した日本人がいたという事実は分かったから。

1—あくまでも「現段階では」分かっているだけ。未来に今の研究が役立ち、驚くべき事実が解き明かされる可能性だってある。／分からなかったのは結果論で、しかも分からなかったからといって何

も得られたものがなかったわけでもない。歴史研究は、その一つの問題にしか役立たないものじゃなく、そこから広げられる。／こういった小さなことから日本と他国とのつながりが見えてきたり、後の他の研究にも関連していく可能性もあるから。／不確定要素の多い中で、様々な可能性を考えることが、歴史のみならず重要なものとなるから。

？一人によると思います。／ジョンやサイモンの経歴を知って何になるのかが分からないから。／流されたかもしれない個人を深く追ったところで、全体に何かすることは無いと思うけど、歴史の研究者たちは何思ってるか想像できない。

ふだん教育学にはあまり関心のない筆者だが、一昨年に読んだ書物からは非常に大きな刺激を受けた^(註10)。そして「教師がスキーマ（暗黙知）を生徒たちに伝える方策」をあらためて考えるきっかけとなった。歴史学習では、さまざまな歴史用語を個別に説明するだけでは不十分である。出来事であれば、時間軸上で前後する他の出来事との因果関係を、また概念であれば、それを個別具体的に示す必要がある。しかしそのように説明をした出来事や概念は、まだその段階では空虚な記号にしか過ぎないので、それを生徒たちの経験に接地させる必要がある。

あるとき中学1年生から大学生までの518人に「現在の皇居は、江戸時代は何だったのでしょうか？」と質問をしたら、「江戸城」と回答した人数が半数に届かなかった^(註11)。小中学校で習っている「大政奉還」「江戸城の無血開城」「江戸から東京への改称」「東京遷都」が繋がっていないのである。記号接地のために、たとえば「京都御所の写真」「江戸城に入城する天皇一行の絵図」「現在の皇居の写真」などを組み合わせて生徒に自分の頭の中にイメージを創造させることが重要となるだろう。

筆者の授業は、しばしば「ディテールが丁寧（すぎる）」と評されてきた。それは「そのような細かい説明事項も試験に出すの？」という質問を暗に含んでいることが多いように思える。しかし筆者にとってディテールとは、試験問題とするための情報ではない。生徒たちに、歴史的なリアリティを感じさせる場面設定のすべである。

今回の授業では、2月4日に品川を出港した威臨丸が、3月17日にサンフランシスコに入港していることに注目させている。現在のように飛行機で10時間弱という時代ではない。その航行中の衣食住を人々はどうしていたのか、生徒本人の生活や経験に関連させる・意識させるだけでも（答までは求めない）、生徒たちの暗黙知は育っていくだろう。

近年は、授業で映像を見せることが日常茶飯事であるが、その映像もたんに見せるだけではなく、「何に・何故」注目するのかを生徒に意識させることが重要だと思う。生徒の日常生活や身体性を刺激する種々のディテールの積み重ねがあれば、「幕府が開国を認めた」と教師が説明をした際に「だからといって、ベルリンの壁が開放されたときのように自由に海外旅行ができたわけではない」と生徒は判断できるようになるのではないだろうか。

筆者は、多くの生徒たちが「サイモンとジョンの南北戦争」の授業を学習過程のみならず結論も含めて、興味深くまた肯定的に受け止めてくれたと考えている。授業をふくめ附高生活のなかで、さまざまな探究型の活動をしている彼らにとっては、結論だけではなく、そこにいたる経過も同様に重要であることを体感しているからだと思う。

6. おわりに

2024年度の筆者の「サイモンとジョンの南北戦争」は、完成された授業とは言い難い。しかし、この教材は様々な可能性をもつ原石である。筆者にとってこれは最後の授業（last lesson）となったが、英語のlastは「持続する・存続する」という意味の自動詞でもある。

2025年度に「サイモンとジョンの南北戦争」の授業を追試行し、進化させようと努力していただいた古澤美徳先生に、そして世界アプローチ研究会の先生方、とくに一ノ瀬雄一先生、浅野典夫先生、小川未来先生、土井啓瑛先生に感謝をいたします。

Ⅲ. 2025年度古澤実践

本章では、古澤が2025年度に実施した、南北戦争の授業について報告する。前章の笹川実践と同様、1月下旬の実施となった。南北戦争には特別に3時間を充て、2時間目に実践1、3時間目に実践2の授業をおこなった。

1. 授業の概要

(1) 単元

2部 近代化と私たち

3章 近代化の進展と国民国家形成

(2) 単元の指導計画 ※（ ）内の数字は時数

1節 1848年～近代ヨーロッパの転換点 (2)

2節 イタリア・ドイツの統一とロシアの近代化 (1)

3節 アメリカの拡大と第2次産業革命 (3)

… 本時（実践1：2/3、実践2：3/3）

4節 帝国主義と世界の一体化 (1)

2. 実践 1

視点をずらす

～ “The Civil War” を例に考えてみよう～

(1) 学習の目標

リンカンによるゲティスバーグ演説から、アメリカ史における南北戦争の意味やアメリカ合衆国の統一、アメリカにおける国民国家の形成、「宗教国家」としてのアメリカ合衆国について理解を深める。

(2) 授業の展開

| 過程 | 学習内容 | 生徒の動き | 教員の動き・留意点 |
|-------------|---|--|---|
| 導入 (5分) | 前時までのふりかえり ※前時までの課題：ゲティスバーグ演説（PDF ファイルで配信）の和訳 <u>MQ</u> ゲティスバーグ演説とは何だったのか、南北戦争とはどのような戦争だったのか | ワークシート②（前時の課題として生徒自身が取り組んだゲティスバーグ演説の和訳）を確認 | Classroom で配信した教材の確認を促す→課題のワークシート②、課題の資料②、本時のワークシート①（各自のPC 端末では、3 画面表示にするなど工夫してWS と資料を提示しておくよう指示） |
| 展開 (40分) | <u>SQ1</u> 南北戦争を英語で何というか → the Civil War（南北戦争）、一般名詞の civil war（内戦）、場所や歴史的な文脈で訳語が変わることを理解する <u>SQ2</u> 南北戦争とは ・ 奴隷制度廃止のための戦争？ ・ 『アングル・トムの小屋』がつくった奴隷イメージ ・ 奴隷解放宣言の実際 <u>SQ3</u> 南北戦争はどのような戦争だったか → 「アメリカ連合国の独立戦争」としての戦争 ・ 日本の戊辰戦争や、独立戦争から 20 世紀末までの合衆国の対外戦争との比較 <u>SQ4</u> リンカン大統領はどのような人物か → これまでの大統領との比較 <u>SQ5</u> 「ゲティスバーグ演説」はどのような演説だったか ・ 民主主義の不滅の宣言「だけ」ではない ・ 多くの死傷者を出したゲティスバーグの戦い→街の規模をはるかに超える遺体と軍馬の死骸→戦後、共同墓地の造営と奉獻式の開催（キリスト教） ・ 式次第の項目を確認 ・ エドワード・エヴァレット ^(註12) による基調講演（追悼演説）の特徴との比較 <u>SQ6</u> ゲティスバーグ演説を聴いてみよう（約 3 分） <u>SQ7</u> ゲティスバーグ演説の内容を確認しよう ・ 演説文の特徴（生と死の対比、固有名詞の不在など） ・ キリスト教の復活思想 ・ 和訳の提示（スライドでの提示と教員による朗読） | 個人ワーク→全体で共有 →ワークシート①に適宜記入していく 個人ワーク→ペアワーク →全体で共有 奴隷解放宣言に人道主義的な観点があったことは否定できないが、戦争に勝つための手段でもあったことを理解する 資料①の原稿は見ずに音声 を聴く（ゲティスバーグの 共同墓地に自身が立っている とイメージしながら） 資料①の原稿や課題（和訳） を確認する | 複数の意見を出させ、全体で共有する 資料②（ホワイトハウスのリンカンルームに展示されているブリス・コピーの写真）をスライドで提示 課題（演説の和訳）を通じて南北戦争についてのイメージや自身の理解に変化があったかどうかもう スライドで解説→北軍・南軍の死傷者数を提示して人的被害の甚大さを認識させる 感染症発生への懸念や、火葬できない理由を考えさせる →キリスト教の復活思想 東部のイギリス英語 ←中西部のアメリカ英語 アメリカの姉妹校からの留学生による朗読（留学生が在籍していない1クラスでは朗読者を募る） |
| 終結 (5分) | <u>MQ</u> ゲティスバーグ演説とは何だったのか、南北戦争とはどのような戦争だったのか →国民国家の再構築のための演説 ・ 合衆国の政治的・経済的・文化的統合の必要性 ・ 誰が「国民」でないか ※映画「シビル・ウォー」（2024 年）の紹介 | 個人ワーク→ふりかえりをワークシート①に記入 | スライドで解説→黒人や先住民、移民の問題に気づかせる 「南北の分断」はアメリカ合衆国の今日的な課題であることにも気づかせる |

(3) 使用教材

| |
|--|
| <p>教科書『明解 歴史総合』（帝国書院）／資料集『明解 歴史総合図説 シンフォニア 四訂版』 ※以下は Google Classroom で配信</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ワークシート①（前時～本時使用のもの）／ワークシート②（ゲティスバーグ演説の和訳を課した本時までの宿題） ・ 資料①ゲティスバーグ演説原稿（ブリス・コピー） Address delivered at the dedication of the cemetery at Gettysburg（イリノイ工科大学シカゴ・ケント・ロースクール憲法民主主義プロジェクトサイト https://constitutionaldemocracyproject.org/file_download/inline/682fcb20-ff20-40e7-927d-3e99be5a356f 2026 年 1 月 25 日最終閲覧） ・ 資料② Gettysburg Address Bliss copy（ホワイトハウスのリンカンルームに展示されているブリス・コピーの写真 https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Gettysburg_Address_Bliss_copy.jpg 最終閲覧：2026 年 1 月 25 日） ・ 資料③映画「シビル・ウォー アメリカ最後の日」の予告編（ハビネットファントム・スタジオ公式 YouTube チャンネル https://youtu.be/ri1-GwJdlAo?si=0yWVeslYSTV80WBk 最終閲覧：2026 年 1 月 25 日） |
|--|

(4) ふりかえり

①授業に関する補足

ゲティスバーグ演説は2分間で行われたとする説もあるが、本実践は笹川実践が参考にしたウィルズ説（『リンカーンの三分間』）を採用した。

また、当初、演説の朗読は、アメリカの姉妹校（Arkansas School for Mathematics, Sciences, and the Arts）から留学中の生徒3名が担当する予定だったが、スケジュール変更により実施できず、笹川氏提供の過去の録音（中西部出身の本校元ALT教員による朗読）を聴かせることにした。現存するゲティスバーグ演説の原稿のうち、本実践では、標準テキストとされる「ブリス・コピー」を用い、朗読を想定して、行数が付されているものを使用した（資料①）。

②笹川実践からの変更点等

事前課題として「ブリス・コピー」に目を通させ和訳をさせたことや、本時において、授業スライドで資料②を提示したことや、最後に、2024年のアメリカ映画「シビル・ウォー アメリカ最後の日」を取り上げ（資料③）、合衆国の現代的な課題を意識させた点が挙げられる。

③生徒のワークシートの記載から

本実践のふりかえり「今回のワークを通して、歴史をみる自身の”視点”をずらせたか？〈ふりかえり・感想など〉」に対する生徒のコメントを以下に掲載する（抜粋）。なお、取り上げた生徒のコメントは、全文をそのまま載せた。

- ・歴史は起こった出来事だけを見ることが多いが、今回のワークを通してリンカンという一人の人物に注目してみると、なぜその行動に至ったのかが分かり、今までの知っていた歴史よりもより深いことを知ることができた。歴史として大きな流れで出来事を学ぶことが多いため、一つの出来事の重大性や未来への繋がりについて再確認することが出来た。
- ・奴隷解放宣言が戦争に勝利するための手段にすぎなかったという意見が面白かった。私たちは美化しすぎているのかもしれないと思った。
- ・奴隷の解放をしたからと言ってリンカンは特別人情を持っているわけではなく、ただ忠実に国の存続にむけて動いているというのは、非情ともいえるけれど最も合理的で冷静な大統領ともいえる態度だと思った。
- ・歴史で学ぶことは自分が当時生きていたわけじゃないし、特に世界史になるともっと身近に感じられなくて事実として頭に叩き込むみたいなのとえ方をしていたけどちょっと前日にあったこととして想像できた。
- ・リンカンはすごくいい人、偉人だと思っていたので、黒人の協力を拒否するなんて驚きでした。二パーセントの人が死んだというのは少ないように感じますが、実際にクラスで考えると多く感じました。
- ・リンカンの演説、思想というのは道徳的なものばかりだと思っていたし、実際にそうだったのかも知れないが、それ以外の戦争の側面も大きかったことを知ってショックを受けた。
- ・リンカンの功績に対する見方にも様々な解釈があることが分かった。また、ゲティスバーグ演説の内容から当時のアメリカの状況を読み取ることができることが分かり、そのような歴史を知ることが語学を学ぶ上でも大切なのだろうと思った（英語が米語に変化したなど）。
- ・南北戦争では南部が敗北したため南部の方がより多くの犠牲を払っていると思っていたが、思っていたより北部側の人間の犠牲者が多く、またアメリカ全体で見ても大きな犠牲を払った戦争だということが今回の学習で分かった。また、リンカンが必ずしも奴隷解放に積極的だったのではなく、人々の賛同を集めるために奴隷解放を訴えていたのに驚いた。
- ・南北戦争を奴隷制の存続を目論む「悪」のアメリカ連合国を奴隷解放を謳う「正義」のアメリカ合衆国が征伐した戦争だと認識していた。だがアメリカ合衆国（北）も資本主義かつナショナリズム、帝国主義の思想を含んだ、清廉潔白とはいえない政府だと改めて認識できた。
- ・南北戦争が奴隷解放のための戦争とは言えないこと、ゲティスバーグ演説が民主主義の不滅の宣言であるとは言えないこと、を知った。「言えない」といっても誤りであるわけではなく、印象が少し変わってくる感じだと理解した。
- ・歴史を見る視点は、今まで歴史を出来事の結果だけを見ていたが、当時の人々の立場や背景から考えることができた。勝った方だけでなく負けた側の人々の視点にも注目できたと感じる。ゲティスバーグ演説は「人民の・・・」からしか知らなかったが、全体をみてどんなことを言っていたのかわかってよかった。
- ・南北戦争について一度は学んだことがあったけれど、奴隷を解放することや奴隷制を廃止することにアメリカが人道的な意味で取り組んでいたのではなく、奴隷制がその時のアメリカに合わない、北部が戦争で勝つにはそのほうが良いなどといった理由で取り組んでいたということに驚いた。また、戦争の結果（どこの国が勝ったか、その後領土や政治にどんな影響があったか）などはよく聞くけれど、今回の授業ではどれだけの被害があったかも学んだので、南北戦争に対する視点が変わった。
- ・私は今まで、南北戦争は奴隷解放のために戦われたという視点からしか見れていなかったが、この授業を通して新たに経済的な視点から見れるようになった。また、奴隷を解放するという政策は、当時は国際的な支持を得やすかったのだということを知った。リンカーン大統領は庶民から努力でなりあがったすごい人、というイメージしか私は持っていなかったが、世間的な人気やイメージのために行ったことも多いということを知って、新たに現実的な人物というイメージも加わった。

- ・私の中で、リンカンはみんなのヒーローのような存在だと思っていたし、中学のときもそのように学んでいたが、実は圧倒的なヒーローではなかったことを知った。誰かのヒーローであれば誰かの敵でもあるため、一方的な見方しかしないのは良くないことだと思った。これからの歴史学習における視点に変化があると思う。
- ・特にゲティスバーグ演説について、有名な「人民の人民による人民のための政治」という言葉のみを根拠として、リンカンは民主主義を訴えたと捉えるのではなく、奉獻式の背景や演説の言葉の特徴や内容を押さえる必要があり、あるいは奴隷問題についても、倫理的というよりかは政策の一環として反対の立場であったことなど、一つの見方から解釈をするのではなく、今回の場合では、周辺の国との関係や、アメリカ連合国への圧力などの観点から多角的に考える必要があると感じました。

④今後の課題

笹川氏の手法と異なる点として、ICTの活用が挙げられる。近年、筆者の授業では（ICTが万能でないことは承知の上で）、Google Classroomで教材を配信し、生徒に課題を提出させている。本時でも、資料を読み解いて話し合う場面は個人ワークとペアワークを組み合わせ、スライドを黒板に投影しながら全体で共有・解説をした。ワークシートはGoogleドキュメント（授業によってはフォームの場合もある）、資料はPDF化したものや信頼のけるインターネットサイトのURLを示すという形をとった。印刷物を配布しないという手法の是非については未検証のため、ここでの言及は差し控え、今後の課題としたい。実のところ、筆者自身は昔ながらの「トーク&チョーク」の授業を否定しないし、むしろそのような形態も、生徒の想像力を育むのに重要だと考えている。歴史を学ぶことの意義は、時空を超えて自らを相対化することであり、授業者の語りで生徒たちの想像力を喚起し、例えば、南北戦

争当時の歴史の舞台に放り込めるかどうかは鍵となる。時間的な制約もあり、ゲティスバーグの共同墓地の描写を十分にできなかったことなどが反省点である。ウィルズ本の巻頭に掲載されている共同墓地の設計図を資料に加えるなどの工夫が必要だったかもしれない。

3. 実践2:

南北戦争とふたりの「日本人」の物語

本節では、ゲティスバーグ演説に続く、南北戦争の3時間目の授業について報告する。笹川実践同様、サイモンとジョンの痕跡を追究する授業である。

(1) 学習の目標

ふたりの「日本人」の入隊記録の分析を通して、アメリカ南北戦争を、移民の動きなど、同時代の世界の動きに関連づけながらとらえる。一連の学習を通して、「歴史とは何か」という問いに対する自分なりの理解を表現する。

(2) 授業の展開

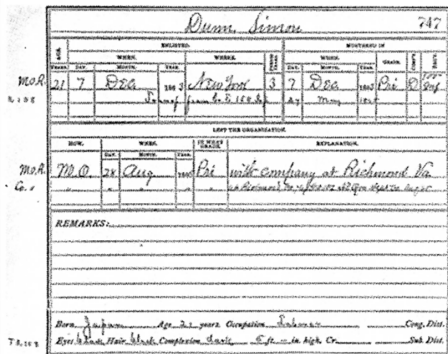
| 過程 | 学習内容 | 生徒の動き | 教員の動き・留意点 |
|-------------|--|---|---|
| 導入 (1分) | 前時のふりかえりと本時の説明 MQ) 南北戦争で戦ったふたりの日本人の物語から何が学べるか | | ワークシート、資料の提示 → Google Classroom に配信されている教材を、生徒の端末で確認させる |
| 展開 (45分) | 2人の入隊記録である資料A（サイモン・ダン）と資料B（ジョン・ウィリアムズ）を読んで、 SQ1) 共通する点を挙げよう SQ2) 相違する点を挙げよう SQ3) 疑問点を挙げよう SQ4) 戦争時の北軍兵士のうち移民の割合は、どの程度だったか？ SQ5) 「大陸横断鉄道は、東はウィスキーが、西はお茶がつくった」はどのような意味だろうか SQ6) 2人の渡米ルートは？ニューヨークまでのルートは？ | はじめは個人で資料を読み、ワークシートに記入→ペアワークで意見を共有 ペアワーク→全体で共有 ペアワーク→全体で共有 ペアワーク→全体で共有 | 個人ワークからペアワークへ促す 複数のグループの意見を聞き、全体で共有、疑問点に答える 複数の意見を聞いて全体で共有 既習事項の旧移民・新移民について解説し特徴を思い出させる カトリックとプロテスタントでは飲酒に対する価値観が異なること、アイルランドがカトリックであること、産業革命時の労働者たちと飲酒の関係について説明 資料集 p.82 の地図で大陸横断鉄道を確認させ、建設の様子の写真なども提示し、スライドで解説 |

| | | | |
|------------|--|------------------------------------|--|
| 終結 (4分) | SQ7) 2人の「日本人」はどのような人物だったか。 MQ) 南北戦争で戦ったふたりの日本人の物語から何が学べるか →歴史研究としての意味を問う | 個人ワーク→ペアワーク →全体で共有 個人ワーク | 新聞・センサス・墓碑などの補足情報を提示 「歴史とは何か」という問いにつなげる |
|------------|--|------------------------------------|--|

(3) 使用教材

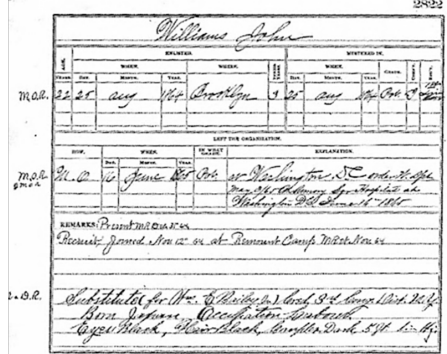
| |
|--|
| 教科書『明解 歴史総合』（帝国書院）／資料集『明解 歴史総合図説 シンフォニア 四訂版』 ※以下は Google Classroom で配信 ・ 本時のワークシート（Google ドキュメント） ・ 資料 A・B（サイモン・ダンとジョン・ウィリアムズの従軍記録。『戦った日本人』より作成し、PDF 化したもの） |
|--|

資料 A



図表0-1 入隊記録 サイモン・ダン
出典：New York, U.S., Civil War Muster Roll Abstracts, 1861-1900

資料 B



図表0-2 入隊記録 ジョン・ウィリアムズ
出典：New York, U.S., Civil War Muster Roll Abstracts, 1861-1900

(4) ふりかえり

①授業に関する補足

資料A・Bは、笹川実践と同じく、『戦った日本人』に掲載されている日本語訳に加え、実際の入隊記録の画像（同書、p.13）を配布資料に掲載し、イメージを喚起しやすいようにした。

②笹川実践からの変更点等

時間的な問題から、幕末の日本人の移動を考察する問題には取り組めなかった。咸臨丸や新島襄など

については、定期考査の発展問題として出題するなど、今後も扱っていきたい。

③生徒のワークシートより

笹川実践と同様、研究の意味を問うたが（5段階評価とその理由）、「意味はある」を評価5とする5段階とした。

- i 研究として意味があったか。5（意味はある）・4・3（ふつう）・2・1（無意味）／？（不明）

| |
|--|
| <p>評価：5（意味はある）20.5%</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 確実な経歴は分からないにしてもそれまでの過程で研究されたことは別の事柄を明らかにする際の手掛かりになる可能性があるため、無意味とは言えないと考えた。 ・ 教科書に載らない「無名の個人」の足跡を辿ることで、当時の日米交流や移民の実態をより多角的・立体的に理解できるから。 ・ 確実な経歴がわからないだけで、全部が全くわからないということはないと思うので、時間が経って、何か資料が出てくることで、研究が加速し、新たな重要な事実が発見される可能性がないとは言いきれないと思うからです。 ・ 歴史を解き明かすために研究することはどのようなことであれ意味があると思う。そのうえで言うならば、日本人がアメリカにわたって、南北戦争に従軍していたということが証明できただけで、今このように日本人の歴史教育に使われている。 ・ 明らかにできない、というのも研究結果の一つだと思うから。 ・ 不確かな情報でも違う資料につながったりすることもあると思うので歴史研究には意味があると思った。また、それらを少しずつ集めることによってなにかがわかるかもしれないと思ったから。 ・ 資料からわかることはそう多くないものの、日本人がアメリカに渡り、南北戦争に従軍するまでにどのようなドラマがあったのか想像力が掻き立てられて面白かった。この授業のきっかけとなったという本も読んでみたいと思った。 ・ 日本人が南北戦争に関わっていたという事実が分かっただけでもとても意味があると思うから。当時は日本人が他国に行くのが珍しい時代なのに、他国の戦争で兵として戦っていた日本人がいたという事実が日本と他国の関わりを考えるにおいてとても重要なのではないかなと思う。また、軍の記録に残っている「肌の色」「目の色」などの項目は、当時アメリカ国内で移民がどのような扱いを受けていたかを知るヒントになって、二人の記録を見るだけでも分かる |
|--|

- ・結果的にわからなかったことでも、現段階で分かっていることを明確にしておくことで後でわかったことと併せて調べると真実を明らかにできる可能性があったり、また他の研究をするときの重要な資料になる可能性がある。わかったことだけでも整理しておくことで資料の保存にも役に立つと思う。
- ・確実な経歴はわからなくても、容姿や入隊履歴などから様々な考察をすることはできる。また、この研究があったからこそ南北戦争に直接関わっていたと知るきっかけになった人も多くいると思うので、意味はともあると思う。
- ・そういう人間がいたんだという事実が大切で、その研究を否定するなら歴史学の否定である。
- ・サイモンとジョンのことについて考えていなければ日本人がアメリカへわたって戦っていたという事実は知られないまま終わっていたが、そのことについて研究することで様々な可能性を考えることができ、ここで考えたことからまた別のことの解明につながるかもしれないから。
- ・南北戦争は実はペリーが日本に来た後に起きたことであると、年号で見たら直ぐわかるが、歴史を縦で見ているため、全然気づけなかった。一つの国の国内の歴史だけに留まらず、世界全体の歴史を見てみると、歴史の横のつながりを感じられて、より世界情勢や時系列、出来事と出来事の因果関係が分かりやすくなったと思った。日本人がもうすでにこの時期にアメリカに渡っていたのは意外で知らなかったため、新しい発見を得られてよかった。

評価：4（48.9%）

- ・もし本当に日本人が南北戦争にしかも2人だけ参戦していたなら、アメリカ陸軍での最初の日系兵士だからとても貴重な歴史だと思う。なぜ渡米したのかもなぜ従軍したのかも、はっきりした考察も出ていない以上、非常に興味深い人物だと思う。でも、なんといいてもたった2人だし、優先して研究すべきかといわれるとそれはそうでもない気がしたから4にした。
- ・意味があると思った理由としては、これらの記録から移民がどのように扱われているのか、移民のどの部分をみて評価しているのか、大方の人生の流れが記録からわかってくるので当時の思想や保存されているということから意味があると思った。しかし、5ではない理由としてはここから時代がどのように動いていたのかなどの大きいイベントがわかるわけでもなく、その後の記録がないということから4にした。
- ・この時代に日本人がアメリカにわたり、従軍していたという事実がわかったこと。また、その時代の渡米経路などを推測することは、技術の発達度などを知るうえで重要だと思った。
- ・サイモンとジョンの詳しい経歴はわからなかったが、資料を比較することで、当時日本生まれの人がアメリカ社会や軍隊にどのように関わっていたのかを考えることができたため、意味はあったと思う。
- ・確かに、サイモン・ダンとジョン・ウィリアムズの二人の確実な経歴はわからなかったかもしれないが、これは研究の失敗ではなくむしろ史料の限界を明らかにし、二人の人物像を整理し今後の研究の道筋を示したという点で十分に意味のある歴史研究だったと思うから。
- ・歴史上に残らない、有名人でも英雄でもない人々が確かに存在したことがわかるから。なかったことにはできない。また、名前・年齢・身長・所属部隊はわかるのに人生の中身はわからないという歴史史料の限界を知ることができるから。わからないままでも、存在を歴史の中に位置づけることが大切だと思う。
- ・この時代は東アジアもアメリカ大陸も、歴史の大きな転換点となる時期であるため、その2つを結ぶ存在であった人について研究することに意味があると思ったから。また、歴史に残る出来事は、何かが大きく変化したときや誕生したときが多いが、それに至るまでの少しの動きや変化による最終的な形であるため、名の残らない動きについても研究する必要があると考えられるから。
- ・アメリカと日本の時代背景をうまく結びつけて考えるよい機会になったと思うから。アメリカの当時の移民についてや、日本の情勢、また日本からアメリカに至るまでのルートなど様々な要素を考えなければならないので、より多くの知識を身につけるきっかけとなったことが良かったと思う。
- ・歴史の細かいディテールを探ることも、時代の空気間を探ることに對して有益であるとも思うが、一方で微に入り細を穿つさまは長すぎる歴史に対し過剰であるようにも思うから。
- ・個人の詳細は不明でも、史料の限界や移民の実態を知る手がかりになったから。
- ・歴史研究の意味は真実を突き止めるためだけにあるのではなく、推測の根拠になり得るピースを見つけるためにあると思うし、推測の幅が広がれば広いほど解釈の幅も広がるので、研究した本人が研究を始める前よりも詳しいことがわかっているなら意味のあるものだったといえると思います。
- ・私はこの資料を読んでより当時のアメリカを想像しやすくなったし、具体的な事例があることで様々な人々の暮らしぶりが見えてきたように感じた。この情報を参考に、他の疑問の解決につながることも期待できる。ただ、これだけの資料ではあまり多くの歴史的発見がなかったため、例えば二人が渡米した経緯や、彼ら自身が書いた日記などより詳細が分かる資料などはもっと意味のあるものになったと思う。
- ・そもそもこの資料がなければ日本人が南北戦争に参加していたという事実を知りえなかったから。しかし、これ以上の情報がないことから意味がないとはいえない。
- ・特定の個人の経歴を追跡する難しさから、公式記録などの一次資料の重要性がわかったと思う。研究において「見つからなかった」という結果でさえも重要な情報となっているので、記録が残りにくい時代の研究における限界や記録の散逸しやすさを示すもので、今後の研究を明確にしたのではないと思う。しかし、最終的にサイモンとジョンの確実な経歴を特定するという目的は達成されなかったため、失敗だったとも言える。
- ・アメリカの兵隊に日本人が入っていたという記録があるなんて想像もしたことがなかったので驚いた。このような驚きは歴史に興味を持つきっかけになる可能性があるものでそういう面では意味があったと思う。しかし、残っている情報が少なくやはり創造とか理想ばかりの考察になってしまうし、この事実が分かったからこれまでの歴史が大きく変わることはないのではないかと思う。興味をとことん掘り下げるのはいいことだと思うけれど、残っている情報が少ない歴史的なものを調べても生まれるものは少ないと、どうしても思ってしまう。

評価：3（ふつう）（23.8%）

- ・結局ほとんど何もわからず気持ち悪い。でも研究はわからないものをしらべるものだから研究ということではいえる意味はあるかもしれない。

- ・日本人が南北戦争前後に移民として来ていたという事実は、紛れもなく証明された。しかし、このときに日本人が来ていたからといって、その情報にはそれ以上それ以下の価値はほとんどない。また、彼らの人物像や生涯を見ても、大きく今の歴史認識に影響を与えることはない。後の時代の研究にこの情報が活かされる可能性も考えて、このことの歴史研究として意味は普通だと思ったから。
- ・海外からの移民も入隊するぐらい大きい戦争だとわかる。
- ・歴史研究においては資料が少ないことで確実な経歴が見つからないことはあると思う。ただ、それによって知られていなかった人の人物像が少し見えることで、表舞台には出ていない歴史が少し注目されると思うからだ。
- ・日本人がアメリカで軍の一員として戦っていたということを知るのには、多角的な視点から南北戦争を考えるのに必要なことだと思うが、確実な経歴が分からない以上、なぜ従軍したのかなどは自分たちで考えるしかないから。
- ・彼等がどんな人物であるかなどが詳しく解ったところで、それ以上の進展、つまり今までの幕府とアメリカの関係が変わるといったことが見えるとは思えないため。
- ・情報が少なくてむずいです。
- ・歴史の授業や教科書では戦争の死者などが数として出てきて、感覚的に分かりにくいと感じていたので、自分と同じ一般の人のことをもっと知りたいと思った。
- ・日本人が従軍していたこと、というか移民の影響がアメリカでその時期からそこまで大きいということに驚いた。
- ・代替兵という制度も、北軍の士気がそこまで高くなかったことも、北軍に移民がそれなりにいたことと、日本人が従軍したことも知らなかったため。多くの発見があった。
- ・有名ではない人々の資料を初めて読んだので面白かったです。なかなか読むことができないものなのでとても貴重でした。私は、「結局わからないままだった」と残念に思うことはなく、その研究をし続けたことが素晴らしいことだと思えます。歴史が完成されているものではないことを改めて実感することができました。
- ・久しぶりに歴史考察ができたのがとても楽しかった。1980年代をテーマにした映画でイタリア系の主人公を警官が馬鹿にして、けんかになっているシーンがあったが、新移民として来た人々と折り合いが悪かった（さげすんでいた）ことを考えるとその行為にも理解できた。
- ・南北戦争は完全にアメリカ内での話だと思っていたので、日本人が少数ながら関わっていたことにびっくりした。まずまずあの年代の日本から色んな目をかいくぐってどうやって渡米できたのか、他に渡米できた人はいたのか気になった。漂流者や逃亡者なら話は分かりやすくなるけど面白味には欠けるな、と思った。なぜこの2人には多くの共通点があるのか、なにか理由があるのかとても不思議に感じた。
- ・確実な経歴が分かっているため、明確な結論が出せていないから。しかし、アメリカの史料から当時のアメリカと日本の関係性や交通事情などを踏まえて推測するという機会を得られたから。
- ・アメリカにはこの2人の日本人だけでなく、様々な国から来た移民も多くいたと思われるのに、この2人に焦点を当てるメリットは特に感じられないから。
- ・内容は面白かったが、これを学んだところで何か重要なことを知ることができたわけではないから。
- ・当時の日本人にもアメリカ軍に入隊した人がいるという面白い事実がわかるし、2つの人生の考察をすることができ、このサイモンとジョンが何か目立つことをした人ではないし、不確定な事実が多すぎるので歴史研究としての意味はあまり無かったのではないかなと思う。
- ・南北戦争という歴史的な出来事のなかに、日本人が参加していたという事が分かったのはとても面白かったが、あまり記録が残っていない、正確性も分からないので、研究する意味はないと思ったから。

評価：2 (2.2%)

- ・サイモンとジョンの経歴からあまり生かせるものや学びを感じられなかったから。それでも、さいごまでつきとめられていたらまだ何か分かったかもしれないからあまり意味がなかったと思う。
- ・詳細な経歴が分かったとしても人類の今後の役に立つのかが分らなかったが、日本人の行動を調べることで、当時の考え方を少しでも知るきっかけになっているのかもしれないと思ったから。人が何を思い生きていたのか知ることになるので、少しでも記録があれば研究する価値があるのかもしれない。

評価：1 (意味はない) (1.1%)

- ・高校生でまともな知識もないのにこんなことをやっても何もえれるものがない。

評価：? (わからない) (3.4%)

- ・記録を比較したり考えたとしても、いまいちよくわかっていなかったことから、果たしてこの記録が本当に正しいものだったのかという点で疑問をもったから。

ii. 感想

- ・歴史は過去に起こったことであり、すべてが確実というわけではないことに加え、教科書で学べるような記録が残るものは一部の権力者などの記録であり、災害などが原因で長い期間残ることがそもそも難しいということを改めて感じました。ましてや無名の人の記録が残るのはまれであり、とはいえ歴史に残らない出来事や行動が歴史に残る事の礎となっている可能性もあると思います。だからこそ、多角的に、様々な資料を用いて歴史を考える必要があると思います。
- ・南北戦争の兵として日本人が従事していたなんてとても驚きました。しかも、ジョンとサイモンという偽名を使っているのが普通は歴史に埋もれてしまいそうなのに、「南北戦争に従軍した日本人」という歴史研究が行われたので、二人の歴史が知られることになり、歴史の研究はとても面白いなと思いました。名もない、歴史に埋もれている人びとの研究をもっと進めたらとても面白いだらうなと思いました。

- ・教科書に名前が載っているような人物ではなく、私たちが知ろうとしなければ歴史の中で埋もれてしまっていたであろう人たちについて深掘し、知ることはとても興味深かったです。
- ・アメリカの移民について、宗教や当時の労働者の生活など様々な要因が絡んでいることがわかって面白かったです。また、ジョンとサイモンの人生の背景を想像するのが楽しかったです。
- ・南北戦争はアメリカ国内の戦争であったが、戦死者の増加によって兵力が足りなくなってくると黒人や旧移民、新移民も参戦していったとわかった。参戦した人々について完全にわかるわけではないが、残っている記録もあるのだということが意外だった。
- ・珍しく個人にフォーカスをあてた授業は新鮮で面白かった。
- ・今までのただ教科書に書いてある内容を学ぶということではなく、実際にその時代を日本人として生きて来た2人の話を読むことで、歴史とは何かという1番本質を学ぶことができた。また、2人はお金のために渡米したのかもしれないし使命感のためかもしれないとたくさんの選択肢を考えて今手元にある情報と組み合わせながら消去するという歴史学者のような体験ができて新鮮な授業でした。
- ・情報は確かに少なかったが、100年以上も前の人の記録が残っていること自体が奇跡であるように感じた。おそらくではあるが当時のアメリカでは日本人はかなり珍しい存在であったと思い、周りに誰も同じ国の人がいない中でかなり厳しい生活を送っていたように思う。彼らの晩年は寂しいものなのではないか。
- ・サイモンとジョンの確実な経歴を推測することはあまりできませんでした。19世紀の歴史資料がすべての事実を正確に伝えているわけではなく、移民や日本人、労働者については記録があいまいであることを感じました。名前や出身地などの情報も信用しにくいという点で歴史を調べることは難しいなと思いました。
- ・当時の情報の扱い方やどのような情報が歴史的価値があるものかということがわかった。
- ・南北戦争の時代に日本人が渡米しているという事実にとっても驚いたが、たった二人のほんの少しの情報から、当時の社会や暮らしをより想像できるようになった。また確実な経歴はいまだにわからないということも、現在との歴史的な違いを体感できて、非常にロマンがあった。
- ・なぜアメリカの情勢、戦争のことを日本生まれの人が知っていたのか、どんな航路で渡米したのか、など何もわからない状態で考察するのは週1で小出しに伏線が張られるドラマのようで面白いなと思いました。
- ・戦争において1人1人の人生があったことの証明は大事だと思うけれど、不確定な情報が多いところが難しいところだなと思った。また、2人についてだけの本が1冊でるところがすごいなと思った。
- ・私は南北戦争については中学校の歴史の授業で少し触れたことがある程度だったので、あまり興味がなかったのですが、資料AとBを読んでサイモンとジョンの人物像を推測したり、当時のアメリカの歴史的背景を知ることで南北戦争について少し興味が湧いてきました。とはいえ、そもそもあまり南北戦争について知らないの、これから学んで基礎知識をつけていきたいと思います。
- ・歴史の記憶というのはのこってるほうが基本的に奇跡。かつ、無名のこの人のことがのこってるのが奇跡である。というのは本当に響いた。このケースだって珍しいらしくて、年々教科書は変わっていくなかで人間が認識する世界で生きていくなかでやっぱり不変のほうに少ないんだなって感じた。個人的にはものすごく感銘を受けたというか、ちょっとよくわからないことも歴史として学んでいくということも面白いなって思いました。
- ・私は小学生の頃からずっと歴史が一番の苦手科目で、ただの暗記やし覚えても生活で役立つためしがないから、ずっと苦手意識があったけど、今日はその歴史を考える側、広く言えば歴史の話を作る側にたてたような気がしてちょっと新しい気持ちを持てた。覚えるだけの歴史は嫌いだけどこのように深く深く考察するような歴史は悪くないなと思った。
- ・当時、日本人がアメリカにいたこと、そして従軍していたことは興味深かった。渡米することはあるだろうと思っていたが、従軍までするとは思っていなかったのが驚いた。また、従軍した際の情報の書かれ方が、やはり少し差別的であることが分かった。

生徒のコメントは、紙面の許す限り掲載した。笹川実践同様、サイモンよりもジョンを選んだ生徒が多く、歴史研究としての評価も近い比率であった。授業中のやりとりや感想で目を引いた点は、サイモンとジョンの肌の色が入隊記録に「浅黒い」と記載されていることを、生徒たちの多くが差別的だと捉えたことだ。現代日本の人びとの肌の色は、幕末の人びとや他の有色人種よりは相対的に「白い」だろう。黒人と区別した「浅黒い」に、生徒たちが憤っていたことは新しい発見だった。近年、欧米でのアジア人差別がニュースやSNSで話題になっていることが背景にあるのかもしれない。

④今後の課題

生徒のコメントシートをどのようなループバックを設定して評価するかという問題が残っているが、

これについては今後の課題としたい。

歴史は、為政者など有名人に関わることから構成され、無名の人間の生きた証は残りにくい。生徒たちは本実践を通じてこのことを実感し、歴史とは何かについて考えを深めたようだ。しかしながら同時に、無名の人びとにクローズアップしすぎては、体系的に歴史を語ることや学ぶことから離れてしまう。マクロな視座で捉えながらも、ミクロな視点を忘れないという、2つの歴史の見方の往還が大切であることを理解してもらいたい。



ペアワークのようす

IV. おわりに

本稿で報告した笹川実践は、卒業生有志で企画された「附高 学び直し会」において「最終講義」の形で再現された^(註13)。古澤は参加できなかったが、当日の記録を映像で視聴し、質疑応答やコメントから、一連の実践に限らず、笹川氏のこれまでの仕事、生徒たちがいかに大きな影響を与えてきたかがよくわかった。

本稿の副題は、笹川氏の本校での「最後の授業」となった昨年度の「サイモンとジョンの南北戦争」や、その前提となる（生徒だけでなく、筆者の歴史観をも塗りかえることになった）「ゲティスバーグ演説」の授業を、筆者自身が継承・発展させていくという意気込み（？）を反映したものである。野暮になるが、笹川実践には本来の意味での「最後の授業」、つまり19世紀フランスの作家アルフォンス＝ドーデの小説『最後の授業』を扱った実践^(註14)があることも付言しておく。

最後に、偶然の出会いからこれまで筆者をいつも励まし異なる場で共に闘ってくれた、本校第41期卒業生で同志社国際中学校・高等学校の大嶋（大田）奈津子教諭に感謝する。そして、笹川裕史前教諭が、世界史教育やわれわれ歴史科教員の後進育成に対して、長年にわたり多大な貢献をされたことに、心からの謝意と敬意を表して結びとしたい。

参考文献

ゲリー・ウィルズ（北沢栄訳）『リンカーンの三分間 ゲティスバーグ演説の謎』共同通信社、1995年
貴堂嘉之『移民国家アメリカの歴史』岩波新書、2018年

貴堂嘉之『シリーズ アメリカ合衆国史②南北戦争の時代 19世紀』岩波新書、2021年
菅（七戸）美弥・北村新三『南北戦争を戦った日本人 幕末の環太平洋移民史』筑摩選書、2023年
リンカーン（高木八尺・斎藤光訳）『リンカーン演説集』岩波文庫、1957年

註

- 1 大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎前教諭（地理・歴史科）
- 2 笹川裕史「複数の『終戦日』－8・15の虚実－」大阪教育大学附属天王寺中学校・附属高等学校天王寺校舎『研究集録 第58集』2016年、pp.73-96
- 3 天王寺校舎での実践については、学校公式サイト^(註15)の教育研究・研究集録のページから閲覧可能。
<https://f.osaka-kyoiku.ac.jp/tennoji-h/kenkyu/kenkyushu/>（2026年1月29日閲覧）
- 4 笹川「民衆を惑わす『自由』－ジェンダーの視点からよむドラクロワ－」『研究集録 第52集』2010年、pp.45-70
- 5 資料Ⅱ-Aは、授業時に資料プリントとして配布。
- 6 資料Ⅱ-Bが「合衆国と南北戦争」の授業プリントである。
- 7 “The Blue and The Gray”『The Crown English Readers New Edition Book One』三省堂、1975年、pp.iv-15.
- 8 資料Ⅱ-Aと資料Ⅱ-C。授業プリントの記載のしかたは、資料Ⅱ-Bと同じである。
- 9 ワークシートのQ3は「一年間を通して「歴史総合」とは、あなたにとってどのような科目でしたか？」で、自由記述としていた。
- 10 今井むつみ『学力喪失－認知科学による回復への道筋』岩波新書、2024年
- 11 笹川「思考錯誤」『研究集録 第67集』2025年、pp.21-40
- 12 笹川実践が参考にしたウィルズ『リンカーンの三分間』では「エヴェレット」とされているが、本実践では近年一般的になりつつある「エヴァレット」表記を採用した。
- 13 「附高 学び直し会」第一講「モンタージュとしての南北戦争」2025年12月7日（日）14:00-17:00、大阪教育大学天王寺キャンパス講義室A
- 14 笹川「『最後の授業』をもう一度」『研究集録 第43集』2001年、pp.25-40

The Civil War and Two “Japanese” Narratives: “The Last Lesson” Once Again

FURUSAWA Miho, SASAGAWA Hiroshi

Abstract: This paper reports on Furusawa’s two high school *Modern and Contemporary History* lessons on the Civil War implemented in 2025, which built upon Sasagawa’s 2024 practice. The first practice incorporates Modern World-Systems Theory alongside the Emancipation Proclamation and Gettysburg Address. The second practice examines two “Japanese” narratives in the Civil War context. The paper also documents the activities of a high school world history teachers’ study group, highlighting the sharing of teaching materials, professional exchange, and mentoring of junior educators.

Key Words: *Modern and Contemporary History*, *Advanced World History*, The Civil War, Migration, Immigration, Japanese Soldiers.